

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

# ボランティア情報

2019  
no.509  
月号



写真左が齊藤さん

「清瀬市学校支援本部」は、地域のさまざまな人々・団体とともに市内の小中学校が実施する教育活動について検討することを目的に設置された組織です。この活動で中心となるのが「地域コーディネーター」。地域住民として学校と地域をつなぐ重要な役割を担っています。主婦である齊藤さんは、小学校のPTA活動をきっかけに活動を始め、現在は清瀬市の統括コーディネーター（市内の地域コーディネーターのリーダー）、清瀬市立第三小学校・第二中学校で現場でのコーディネーターとして活躍しています。

齊藤さんには、印象的なエピソードがあるそうです。三小では、主に4年生の授業で高齢者や地域の福祉施設のことを学びます。齊藤さんには、「高齢者との関わりが少なくなっている子どもたちにもっと地域や生活の場面で高齢者とのつながりについて考える機会をつくりたい」という想いがありました。そこで、きれいな季節の飾り付けのされた4年生の俳句の作品が、学校と施設をつなぐきっかけになると考え、学校の先生・社協に相談し、地域の高齢者施設に掲示することになりました。「子どもたちとの接点が少ない利用者さん、ご家族、施設の職員さんが、子どもたちの頑張りを感じ笑顔が生まれました」と齊藤さんは話します。そして、齊藤さんの働きかけをきっかけに、小学生がその施設を訪問し、高齢者や職員との直接的な関わりを通して、学びにつなげる福祉教育の取り組みも生まれました。

齊藤さんは、小学校ではイベント、中学校では学習支援を中心に地域をつなぎ、新しい協同の活動を実現させてきました。齊藤さんは、「行政や社協が直接学校に相談するよりも、コーディネーターが間に入ったほうがうまくいくことがあります。きっと地域住民の立場だからこそ気軽に、丁寧に耳を傾けてくれるのだしょね」と語ります。地域一丸となった教育を創造する地域コーディネーター、福祉教育の実践を展開するうえでも注目すべき存在です。



地域と学校を結ぶ架け橋として  
子どもたちの成長を  
皆で支える地域へとアレンジするコーディネーター

齊藤 しのぶさん

東京都清瀬市  
清瀬市学校支援本部 統括コーディネーター  
清瀬市立第三小学校・第二中学校 地域コーディネーター

№.509

## CONTENTS

特集

伝統芸能とボランティア・市民活動 ～地域の文化で織りなすまちづくり～

06

・企業の子カラ

福岡市 株式会社飛鳥 飛鳥会館（葬祭業）

～地域との絆を基盤に、社協ボランティアセンターと協働する社会貢献事業を実施～

07

・ボラセンと地域をつなぐSNS

・グローバルな地域をともにつくる

08

・保険のひろば

・INFORMATION

・事務局だより

## 特集

# 伝統芸能とボランティア・市民活動 ～地域の文化で織りなすまちづくり～

ボランティア・市民活動を通じたまちづくりを進めるにあたっては、その地域の文化へ着目することが欠かせません。

地域の伝統芸能にボランティア・市民活動がかかわることで、市民が文化を継承する者として自分たちの暮らす郷土への理解、地域の一員としての意識を深めることができます。さらに、伝統芸能を介してさまざまな住民の社会参加と多者協働の場がつくられることで、まちが育っていくことが期待できます。

今回の特集では、社協・ボランティアセンターが中心となって伝統芸能を活かしたまちづくりの事例を紹介し、各地で取り組むうえで参考となるポイントを紹介します。

## 事例1

## 青森県五所川原市社協 ケア付き立佞武多「夢かなえ隊」

～さまざまな住民による伝統祭りへの参加を通じたまちづくり～



青森県 五所川原市社会福祉協議会

地域福祉課 主事 寺田 みづきさん  
地域福祉課 課長 森 嘉彦さん  
常務理事兼事務局長 平山 博文さん  
左から寺田さん、森課長、平山局長

五所川原市社協（以下、市社協）では、地域を代表する伝統的な祭りである「立佞武多\*（たちねぶた）」に、高齢や障害を問わず誰でも参加して楽しめることを目的として、ケア付き立佞武多「夢かなえ隊」\*\*（以下、夢かなえ隊）というプロジェクトに2011年から取り組んでいます。

年々規模は拡大し、9回目となる今年度は、総勢120名が集まる一大チームとなりました。このプロジェクトは、町内会のメンバーを核に、さまざまな地域住民が準備段階から主体的に関わる、多者協働の取り組みであることが特徴です。

地域の皆で作りのあげた立佞武多が出陣していく姿は圧巻です。五所川原市の伝統芸能を取り巻く地域づくりの様子と社協の活動について紹介します。

### 五所川原の伝統祭「立佞武多」の復活

五所川原市は、青森県の津軽地方に位置し、近隣の豊かな木材資源や水産資源などを中継する商人の町として古くから栄えてきました。明治から大正時代には、夏の祭りに豪商や地主たちが富と力の象徴として大きな山車を作り、にぎやかなかけ声とともに高さを競い合っていたそうです。戦後、ねぶたは小型化し、町内会を中心とした祭りが引き続き実施されていましたが、1993年に復元プロジェクトが立ち上がり1996年に約80年ぶりに立佞武多と命名されて、復活することになりました。それ以来、五所川原の立佞武多は、青森ねぶた、弘前ねぶたと並び青森県を代表する一大イベントに成長していきました。

その一方で、祭りが大規模化・観光化したことにより、地域住民が以前のようになく、その結果、町内会を中心に

住民たちの協力で作りのあげてきた素朴なねぶたはほとんど見られなくなりました。五所川原市のねぶた祭りは地域に根付いた行事から、主に市行政や愛好会が主導する観光イベントと変わっていきました。

### ケア付き立佞武多「夢かなえ隊」がスタート

立佞武多が復活してから、積極的な関わりができないもどかしさを感じる地域住民は多く、障害のある人の多くもまた同じ思いを抱いていました。市社協では、ボランティア連絡協議会との協働で、障害のある人たちと立佞武多を見て、祭りの雰囲気と一緒に楽しむ取り組みを以前から行っていました。

しかし、次第に彼らから「自分たちも祭りに参加してみたい」という積極的な声があがってきました。そこで市行政に相談し、市が作った新作大型立佞武多チームに入れてもらうことになりました。

こうして「夢かなえ隊」プロジェクトが2011年から始まりました。

しかし、初期の取り組みは、主催者側による安全面の配慮から、立佞武多を引く隊列やお囃子隊とは完全に区切られ、車いすの集団が後についていくというものでした。あくまでも特別なサービスを受ける側としての参加であり、一体感も少なく、観客からの評判もあまり芳しくありませんでした。

### 町内会をベースに、地域で多くの関係者が参画する活動へ

そこで市社協は、独自に立佞武多を作って参加している市内でも数少ない町内会のひとつに協力を依頼することにしました。その町内会のねぶたリーダーは「立佞武多は住民参加の祭りであることが、最も大切だ」と、夢かなえ隊の趣旨に全面的に賛同してくれました。

町内会をベースとした活動へ移行してから、夢かなえ隊はより地域に根付

\*「全国ボランティアコーディネーター研究集会2020東京」(2020年1月31日締切)

ボランティアコーディネーションに携わる人々が、全国からその活動分野を問わずに集い、活動分野や立場を超えて活発な議論や対話を行い、知識や技術を磨く。今年は2020年2月22日(土)・23日(日)の2日間、東京都内で開催。

(詳細は「日本ボランティアコーディネーター協会」で検索)





ボランティアとともに観客へオリジナルのうちわを配ります



ケア付き立佞武多の様子



障害のある子どもと一緒に太鼓を叩くボランティア

いた多者協働の取り組みとなっていました。市社協の直接的なつながりからは、ボランティアセンター登録者、日常生活自立支援事業で関わりのある銀行、福祉教育でつながっている小・中・高校及び教員、市内出身で近隣の大学・短大などに通う学生、ガイドヘルパー、隣接市町社協など、さまざまな人々・団体に協力を呼びかけました。

また、市社協地域福祉課の森課長は、ある地元企業から社会貢献活動としてボランティアをしたいという相談を受けていました。毎年丁寧に夢かなえ隊の活動を説明しに伺ったことが功を奏し、今では若手社員を中心に企業もおなじみのメンバーの一員となりました。市社協の寺田さんも、新たなつながりを開拓するために地域の病院に頻繁に足を運び、ボランティアとしての参加を呼びかけました。

そのほかにも、メンバーのつながりが次々に生まれ、青年会議所、ローターアクトクラブ、婦人会などさまざまな人が夢かなえ隊に集まりました。市社協の平山常務理事兼事務局長は「皆それぞれの想いがあったとは思いますが、地域で誇れるねぶたを皆でつくりあげたいという想いは共通だったのではないのでしょうか」と話します。

ねぶたの湾曲した骨組みに紙を貼っていくのは、非常に手間のかかる作業です。初期段階には、市社協の職員たちも2か月間毎日遅くまで製作の手伝いをしました。

### 皆が大事な役割をもつ

当日のメンバーの役割は、①誘導班（全体列の四隅について隊列を守る）、②運行班（車いすの人をサポートする）、③記録班（写真撮影をする）、④盛りあげ班（「やってまれ！やってまれ！」という掛け声をかける）⑤保健班（参加者の体調管理や救急の対応をする）等です。また、メンバーはそれぞれの特性を活かし別の役割も担います。車いすのメンバーは、主にうちわを渡す役割を担い、観客との交流を通して祭りを盛り上げます。婦人会は、おにぎりを作って皆の元気を支えます。森課長は「この土地では祭り参加者がみな同じくおにぎりを食べ、語り合うことで、さらに連帯感が強まる雰囲気があります。メンバーが障害のあるなしにかかわらず車座になって笑顔で過ごしている様子は、全員がチームとして一つになったと感じ、涙が出ました」と振り返ります。それぞれが役割を担い、地域の伝統であるねぶたをともにつくりあげ、ともに盛り上げることで、同じ地域住民としての一体感が生まれてくるのです。

### ねぶたを通じて築いた信頼関係と社協の役割

夢かなえ隊のメンバーとして参加した障害のある人は、自分たちも祭りの主人公の一人だという意識をもち、より自信がついたという変化が見られたそう

です。「違う祭りにも参加してみたい」という新たな思いも生まれました。そのほかのメンバーからも、「夢かなえ隊の活動に参加することで、以前のように祭りが身近な存在になりました」と、準備段階から地域住民でねぶたをつくりあげる喜びの声も聞こえてきました。

寺田さんは、「毎年地元の高校や企業に参加を呼びかけていますが、多くの方が即答で、『今年もぜひ参加させてください！』と返してくれます」とメンバーの継続的な関わりを嬉しそうに話します。仕事終わりに駆けつけてくれる人や進学や就職で市内から離れても毎年遠方から参加してくれる人もいます。平山局長は、「社協職員も地域の人たちと一緒に汗をかきながら準備をし、祭りに参加し、反省会ではお酒を酌み交わしました。ひとつのことに向き合い顔をつきあわせながら話をするからこそ、信頼関係、深い関わりが生まれたのではないのでしょうか」と語ります。

夢かなえ隊をきっかけにして、他のボランティア活動への参加につながったケースも多いそうです。今後も、多くの住民の夢をかなえるために、さまざまな活動をサポートしていきたいと市社協の皆さんは力強く語ってくれました。

\*立佞武多：高さ約23m、重さ約19トンという巨大な人形灯籠。おもに三国史や歌舞伎などに登場する歴史上の偉人を題材とし、山車に乗せて町を練り歩く。

\*\*青森県社協「高齢者・障がい者等の自己実現に向けた基盤整備事業」助成事業（平成23年～27年）

## 事例2

日光市社会福祉協議会「NIKKO高校生ボランティアネットワーク」  
～高校生への伝統芸能継承を通じたまちづくり～

栃木県 日光市社会福祉協議会 地域福祉戦略室長 兼 足尾支所長

まつもと まさひろ  
松本 昌宏 さん

栃木県の山間部には、過疎化・高齢化が急激に進行している地域が多くみられます。若年層の人口流出によって地域の担い手不足が顕著となり、これまで若者（若衆）たちが重要な役割を果たしてきた伝統文化は、次々に廃止に追い込まれています。

日光市社協（以下、市社協）では、「NIKKO高校生ボランティアネットワーク」（以下、高校生Vネット）に所属する高校生たちを結びつけ、問題解決の一翼を担ってもらおうと考えています。本事例では、高校生Vネットが取り組む2つのプロジェクトのうちのひとつ、人口減少等が進む川俣地域と高校生ボランティアによる新たな地域づくりを模索する「カワマタスマイルプロジェクト」の取り組みを紹介します。

## 高校生たちのチカラを地域に活かす

高校生Vネットが組織されたのは、2013年のことでした。市内には部活動としてボランティア活動を行っている高校が3つあります（現在は2校）。市社協の松本さんは、高校生により自分たちの暮らす地域のことを知ってもらい、ゆくゆくは地域に関わってもらえるような人材を育むために、これらの部活動をネットワーク化し、高校生Vネットを立ち上げました。

「高校生の活動のネットワーク化を考えた大きなきっかけとなったのは、2011年の東日本大震災です。大きな被害を受けた被災地の現状を少しでも知ろうと、市内の高校生33人とともに宮城県東松島市を訪れました。これが契機となり、地元の高校生たちと一緒に仮設住宅を訪問したり、サロン活動などを実施する『ココカラハジマルプロジェクト』が誕生しました」と松本さんは振り返ります。

被災地でのボランティアを体験した高校生たちは、松本さんの働きかけもあり、次第に地元への愛着心が芽生えていきました。ニュースで聞いても、あまり自分には関係ないと思っていた地域の過疎問題。被災地のお年寄りをサポートするうちに、困っている人たちは地元にもたくさんいることに気づいていきました。そこで松本さんが次に打ち出したのが、市内の山間部と高校生Vネット

のメンバーたちを結びつけて、地域住民とともに衰えゆく伝統芸能や地域の困りごとに取り組む「カワマタスマイルプロジェクト」だったのです。

## 地域住民からの理解と協力

このプロジェクトの拠点になった川俣地区は、市内でも山深い地域に位置しており、古くからの慣習が残っている地域ですが、高齢化率が50%を超えている超高齢集落です。数ある過疎地域のなかから川俣地区が選ばれたのは、地域の重要な伝統芸能の継承という大役を住民でもない高校生ボランティアが関わることを理解し、受け入れてくれるキーマン（自治会長）の存在が大きかったそうです。この方は元行政マンだった経歴もあり、伝統文化が衰退していくことに危機感を募らせていました。

「カワマタスマイルプロジェクト」を実施するにあたり、地域のさまざまなメンバーで構成される「川俣みらい委員会」を設置し、企画・運営を行いました。メンバーとなったのは、自治会、若衆、かあさん（地域の女性陣）、高校生、共感者、

地域おこし協力隊、市行政、市社協、などです。基本的に「地元のことは、自分たちで考えていく」という方針を大切に、市社協はあくまでコーディネート役に徹しました。委員会を組織化する際には、自治会長も地区の住民に理解を呼びかけ、全面的にバックアップ体制を整えてくれたそうです。

とはいえ、川俣地区は古くからの風習が続いてきた男性中心のタテ社会です。「地元の伝統文化は、自分たちだけで守る」というかたくなな方針がありました。縁もゆかりもないよそ者の高校生たちが、簡単に入り込んでいける世界ではありません。活動がスタートした当初は、夏祭りの獅子舞の警護役（若衆の羽織を着込み、観客が獅子舞に近づきすぎて怪我をしないように守っていく）を高校生Vネットのメンバーたちが担当しても、地元の人たちは複雑な感情を隠せませんでした。

しかし彼らのサポートなしでは、伝統文化は存続の危機にあるのも事実です。「これまでの風習にとらわれず、新しい発想を取り入れてもっと高校生ボランティアのチカラを積極的に活用していく



川俣みらい委員会の様子

心縁祭では地域の特別な存在になった証として杯を交わします



夏祭りの獅子舞の警護役を担う高校生



伝統の獅子舞

べきだ」と川俣みらい委員会に参加する女性たちも、次第にそう発言するようになりました。「改革には女性のチカラが不可欠です。男社会の川俣地区ですが、委員会にはぜひ彼女たちの視点を取り込みたいと考えていました」と松本さんは語ります。

### 高校生Vネットが体験した川俣地区の伝統活動

活動は基本的に月1～2回のペースで実施されます。獅子舞の警護役の他にも高校生たちは、地域の祭りで繰り広げられる「石焼き」（河原に人が集い、石を焼いて余熱で魚や山菜を焼いて食べること）、地域に住む男子が20歳に達すると一人前のムラ人として承認する「元服式」、山に生息する鳥獣を狩って食べる「マタギ文化」、川俣地区の名産でもある「そば栽培」、大自然での「フィールドワーク（ボート、つり体験）」、冬の間に積もった雪資源を活用した「夏の雪遊び」など、これまでまったく味わったことのない体験を次々と重ねていきました。

頻繁に地域を訪れ、活動に参加するうちに、最初は「よそ者」だった高校生はいつしか地域住民に名前を覚えられ、「〇〇くん」と呼ばれるようになりました。夏祭りには、彼らが文化祭のような明るい雰囲気模擬店を出店し、祭りを

盛り上げています。それはかつて露天商が華やかに立ち並んだ祭りの賑わいを思い出させてくれました。「若者たちが、村に活力を与えてくれる」今では多くの人たちが、そう評価しています。

高校生Vネットのメンバーたちは、3年生になると活動から卒業してしましますが、この関係が終わってしまうのは忍びないことです。そこで卒業する学生のために「心縁祭（しんえんさい）」という行事が生まれました。元服式をモデルにし、地域の人たちと固めの杯を交わす「心縁の儀」、認定証や記念のバッジなどが授与される「川俣人承認の儀」などで構成される式典です。心縁祭には「第2の故郷として、これからも川俣地区に深く関わってほしい」という願いが込められています。

### 地域住民にも高校生たちにも、双方にメリット

「カワマタスマイルプロジェクト」は、川俣地区の住民、高校生のメンバー双方に大きな効果を生み出しました。松本さんは「このプロジェクトに参加した高校生は、自分たちの地域には誇りに思える歴史や文化があり、それらを守ることの大切さや住民同士の助け合いの大切さを知ったと語ってくれます。現地の住民から生活の知恵を学び、人の優しさにもたくさん触れました。言葉遣い

や態度が悪いと怒られたのも、経験の少ない高校生たちにとっていい勉強になったようです。プロジェクトでの体験はすべて血となり肉となり、彼らの地元愛を育んでくれることなのでしょう。自分たちは地域で何ができるのかを考えるきっかけにもなりました」と語ります。

川俣地区の住民にとっても、大きな変革をもたらしました。当初は「高校生（外部の人）のチカラなんて役に立つのだろうか」と懐疑的な意見も多くみられましたが、若者たちのパワーが地域を活性化し、元気を与えてくれました。川俣地区の住民も、新しい発想を取り入れることこそが、自分たちがこれまで大切に守り抜いてきた伝統文化を継承する方法なのだと気づいたのです。

松本さんは、「現在、川俣地区でみられる地域課題は、いずれ近いうちに日本のあらゆる場所で生じる問題だと考えています。社協はボランティアコーディネーションの機能をフルに活用し、若者と地域をつなぐことができます。高校生の主体形成と地域のニーズを両にらみするのは簡単なことではありませんが、地域のさまざまな機関を巻き込んで信頼関係を築きながら課題の共有や解決方法を考えるなど、活動を一緒に進めていくことがポイントです」と話します。「カワマタスマイルプロジェクト」の取り組みには、次の時代の地域をつくるヒントがありそうです。

# 企業のキカラ

さらなるボランティア・市民活動発展へのカギ

CSRやCSVの推進が課題となるなか、企業によるボランティア活動に注目が集まっています。企業とボランティア・市民活動にはどのような接点があり、その意義はどこにあるのでしょうか。本コーナーでは、具体的な取り組みを紹介しつつ、企業によるボランティア活動の可能性と新たに生み出され得る社会的な価値について探っていきます。

## 第27回 福岡市 株式会社飛鳥 飛鳥会館（葬祭業）～地域との絆を基盤に、社協ボランティアセンターと協働する社会貢献事業を実施～

### 会社概要

福岡市 株式会社飛鳥 飛鳥会館

代表：古賀匡郁（代表取締役社長）

創業：1951年

社員：23名

1951年に福岡市南区で造花店として開業、1980年から葬祭業を開始。福岡市南区と近隣市町を中心に、故人や遺族の希望に応じた葬儀を6か所の式場で23名の社員がプロデュースしている。

### 先代から続く社は「地域に成果を還元する企業であれ」

株式会社飛鳥 飛鳥会館（以下、飛鳥会館）は、福岡市南区を基盤に葬祭事業を展開し、区内と近隣で6か所のセレモニーホールを運営しています。飛鳥会館で事業全般を統括する角野隆一さんは、「先代社長は、『南区で事業を行っているのだから、成果や利益は南区に還元しなさい』と言っていました。この言葉を常に意識し、地域にどのような社会貢献ができるのかを考えてきました」と振り返ります。

この考えのもと、飛鳥会館では老人クラブが主催するグラウンドゴルフ大会のスポンサーや、区内の老人クラブや福祉施設向けの日帰りバスツアーに、バスと運転手を提供し、本業に差し障りがない友引などで地域貢献を行ってきました。角野さんは「地域に開かれたおつきあいを心がけてきました」と語ります。

セレモニー用のバスに最初は複雑な気持ちでいたツアー参加者の方々も、飛鳥会館とのつきあいを重ねることで気持ちも変わっていきました。そのような取り組みの積み重ねが、2000年に飛鳥会館が区内に新たなセレモニーホールを建築する際、住民からの「地域に必要な施設」という発言につながりました。



飛鳥会館のバスが活躍、ボランティアは乗降を支援します

### 「企業の思い」と「社協のコーディネート力」がつながる

福岡市社協の「ずーっとあんしん安らか事業（※）」でつながりのあった飛鳥会館から、社会貢献活動の思いを聞いた南区社協は、2014年に買い物が困難な高齢者をスーパー等へ連れていくことができないか提案しました。角野さんは、「地域に恩返しをしたい思いも強かったのですが、躊躇したことも事実です」と語ります。買い物支援の場合、さまざまな状況を抱えた住民が利用するため、バスの乗降時や移動中の急ブレーキでの事故を心配したのです。南区社協は、買い物支援の利用者の安全をしっかりと確保するボランティアも同乗することで、飛鳥会館の不安を払拭しました。

角野さんは、「南区社協は、バスへの乗降や荷物運びなど利用者をサポートするボランティアを、10人に対して7～8人、5人に対して3～4人と、実施状況にあわせて確保し、当日の協力に結びつけてくれます。幅広いつながりで多くの市民に参画してもらえようボランティア活動をコーディネートしてくれることが、社協に関わったことのない私には新鮮な驚きでした」と語ります。

買い物支援活動開始当時は丘陵部1か所での実施でしたが、現在では区内4か所で1か所あたり月1回の運行を行っています。飛鳥会館の役割は、バスの提供と燃料代を負担し運転手を派遣することです。南区社協はボランティアの募集とコーディネートを担い、校区社協、町内会、民生委員・児童委員等と協力して利用者との連絡調整を行っています。



買い物・荷物運びもボランティアがサポートします

### 社会貢献活動が、本業を高める企業努力に波及する

バスの運転に携わる飛鳥会館社員の一人は、利用者と年齢が近いベテラン社員です。角野さんは、「バス運転は、本業では悲しみのなかにいる方々の送迎になります。しかし買い物支援では地域の方々と会話を楽しむことができ、地域住民とのコミュニケーション力も向上します」と話します。

「現在、葬儀社には不動産や相続、お寺やお墓のことまで、セレモニー以外のさまざまな相談事が寄せられる時代になりました。企業努力で地域の信頼を得る重要性和、一人ひとりの人生に深く関わることに對し、心して接していきたい」と角野さんは語ります。買い物支援事業を利用されていた住民が飛鳥会館でセレモニーを行った際、角野さんは地域貢献に携わる企業としての責任を感じたそうです。

地域に根ざした企業としての努力と、サポートする社協ボランティアセンターの思いが結びつき、買い物支援の取り組みは6年めを迎えています。

#### ※「ずーっとあんしん安らか事業」

福岡市社協の事業。高齢者が安心して生活を送れるよう、事前に預託金を福岡市社協が預かり、葬儀・家財処分等のサービスを実施する。また、契約後は定期的な見守りサービスも行う。





## ポラセンと地域をつなぐ SNS

～はじめてのSNSコミュニケーション講座～

地域のボランティア活動を盛り上げていくためには、SNSを活用した市民とのコミュニケーションが有効です。連載を通してICTのプロから情報発信・交換の基礎を学びます。日々の業務や活動のなかで実践してみましょう！



サイボウズ株式会社 **柴田 哲史**  
 マイクロソフト社にて開発業務を担当後、ITコンサル会社を設立。2011年以降、全国各地の災害ボランティアセンターのIT支援を実施。2015年よりサイボウズ社に所属しつつ、被災地支援を継続中。

### ● Vol.7 地域コミュニティが災害時に役に立った！

#### 避難所の開設状況をほぼリアルタイムに掲載

10月12日、台風19号により多摩川の水位が上昇し、調布市では初めて避難勧告が出され、避難所が18か所開設されました。その際に、調布Facebook交流会\*がとても役に立ったという声が多かったのでその記録をご紹介します。

#### 台風当日に実施したこと

まず、すぐに実施したのは、それまで非公開としていたFacebookのグループ設定を公開に変更し、たくさん拡散されることにより、より多くの市民の方が情報を得られるようにしたことでした。そして、18か所の避難所の場所を地図付きで投稿し、どの避難所が近いのかをわかりやすく提示しました。

さらに、避難所に行ったメンバーには

その避難所の中の様子を写真で共有してもらいました。それが「避難したくない」という人の心の壁を少しでも低くできると思ったからです。しかも、すぐに避難所がパンク状態になることはたやすく想像できたので、満杯なのか、まだ空きがあるのかということも現地から投稿してもらいました。

#### \*調布Facebook交流会とは

2011年、調布市にある東京スタジアム一時避難所が閉所後、当時のボランティアを中心に作られた Facebook上のオンラインコミュニティ。調布市民を中心に4000名以上が参加。  
<https://www.facebook.com/groups/chofu123/>

#### 効果的だったことと今後の課題

市のホームページがつながりにくかったり、防災無線が聞き取りにくかったりするなかで、特に効果的だったのは、避難所の位置を含めた開設状況と中様がFacebook上でほぼリアルタイムでわかったことでした。特に現地写真は、避難するかどうかのよい判断材料や安心につながったようです。

メンバーからは、「テレビでの遠い情

報より、この交流会で刻々とアップされた地元の情報はとてもありがたく、役に立ちました」「市のホームページはつながりませんでしたが、この交流会で近隣の細かい情報が得られて大変助かりました」などのコメントが寄せられました。

一方、今後の課題としては、SNSを使用していない市民への情報提供をどうするかという問題があります。また、障害者や要介護者への情報提供も大きな課題の一つです。そして、災害時にはデマや間違った情報が流れることはよくありますが、その際は迅速な対応が大切です。また、スピーディに情報を整理して発信できるメンバーの育成と、実際に市内各地の情報を掲載してくれる多くのメンバーの存在もとても重要になり、いかに普段からそのツールに親しんでもらうかが成功のカギとなるでしょう。

今回は、普段からツールに親しんでもらうための運用のコツをお話します。



## グローバルな地域をともにつくる



地域で多文化共生活動に取り組むさまざまな登場人物の実践や思いをお伝えします。各地の実践から外国にルーツをもつ人々とともにめざす住みよい地域づくりのヒントを見つけましょう。

認定NPO法人  
多文化共生センター東京



### 制度の狭間で見過ごされた子どもたちに教育の機会を

#### 「教育の対象」から外れた行き場のない子どもたち

2018年現在、東京都には、約55万人の在留外国人(東京都人口の約30人に1人)が生活し、公立学校に通う外国にルーツのある子どもの数も増加傾向にあります。しかし、一方には、多くの子どもたちが教育の機会に結びついていないという課題が存在します。

多文化共生センター東京代表理事の柊木典子(はげき のりこ)さんは、「義務教育が保障されているのは『国民』であって、外国籍の子どもはあくまで『希望する者』と位置づけられています。また、出身国で義務教育を終えても、日本の高校に進学するための十分な日本語習得の機会のないまま進学を余儀なくされている子どもが数多くいます。教育を受ける機会は将来を切り拓くために欠かせないものですが、不就学のまま学びに繋がらず、行き場のない子どもが数多

く存在するのです」と現状を語ります。

#### 地域の民間組織にできること

多文化共生センター東京は、主に、来日したものの就学の機会のない外国人の子ども(主に15～18歳)の教育・生活相談、フリースクールなどの活動を行っています。センターでは、民間組織ならではの柔軟さを活かしながら、都内を中心とするさまざまな団体とのネットワークで活動を展開しています。近年は東京ボランティア・市民活動センターの協力もあり、資金面に加え、キャリアプログラムへの参加、教材の寄贈など、企業とタッグを組んで活動しています。また、荒川区社協とは、同じ区内の団体同士、地元企業や活動場所の紹介など、ことあるごとに連絡を取り合い、信頼関係を築いています。

柊木さんは、約15年にわたる経験から、次のように話します。「多文化共生

について制度の構造的な問題があるため、民間組織の力が必要です。例えば、社協は外国人支援を専門にしている団体ではありませんが、防災を始めとした関係団体との連携に加え、就学支援の案内を翻訳しアウトリーチの段階で紹介したり、翻訳アプリなどを用いてコミュニケーションをとるなど、アプローチの方法が色々ありそうです。今後は、多文化ソーシャルワーカーの取り組みも大きいです」と地域のフロンティアとして住民に直接関わることでできる社協の可能性を語ってくれました。



フリースクールには、学び場を求め他県から通学する生徒もいます



### 資料紹介

「権利擁護・虐待防止2019」(全社協 政策企画部)

2019年版では、子どもの権利条約が国連総会で採択されてから30年、日本が締約国となってから25年を迎えることから、「子どもの権利の実現をめざして」を特集テーマとして、権利擁護・虐待防止等の現状と課題を全分野にわたって掲載。1冊1,000円(税込)。(詳細は「全社協」ホームページから「権利擁護・虐待防止2019」で検索)

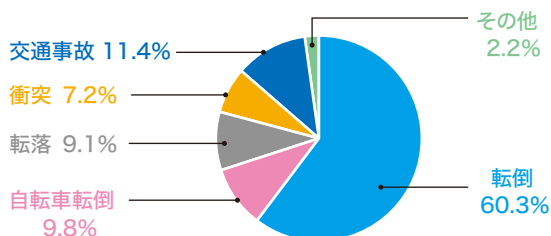
# の ば 陰 保 護

ボランティア活動保険等の補償制度は、社会福祉協議会およびその構成員・会員ならびに社会福祉協議会が運営するボランティア・市民活動センターなどに登録されているボランティア・ボランティアグループ・団体が加入対象です。

## ボランティア活動保険の事故例と防止策について

### 1. ボランティア活動保険の原因別傷害事故発生状況

傷害事故の70%以上が転倒事故！



ボランティア活動保険の傷害事故を原因別に分析すると転倒事故(自転車転倒を含む)が約7割を占めています。

屋内・屋外を問わず、転倒事故防止の注意喚起を促し、事故を未然に防ぎましょう。

#### ●転倒事故の防止策

- ・屋外を歩行する際は、障害物(階段・段差、看板、電柱等)や周囲の歩行者、自転車に十分注意してください。特に、道路を横断する際には、走行してくる自動車に気を付けましょう。
- ・滑りにくいサイズがあった靴を着用し、両手がふさがらないようリュックサックやボッシュットを使用しましょう
- ・普段からウォーキング、エクササイズ、ストレッチ、筋力アップ等によって健康維持・体力増強を図ってください。

### 2. 災害ボランティア活動の事故例と防止策

災害ボランティア活動では一般の活動と異なる事故が発生しています。

#### ●災害ボランティア活動における傷害事故

##### 【被災地に特有の環境に起因する事故例】

- ・ぬかるみに足をとられて転倒して手をつき、手首をねん挫した。
- ・被災地で活動中、粉塵が鼻から喉に入り炎症を発症した。
- ・住宅内のタンスを運搬していた際、床が抜け転倒し、腰を負傷した。

##### 【危険物に起因する事故例】

- ・がれきの撤去作業中、廃材に刺さっていた釘を踏んで足を負傷した。
- ・廃棄物を分別していた際、ガラスの破片で手のひらを負傷した。

##### 【慣れない道具の使用に起因する事故例】

- ・泥の除去作業中、スコップの柄が顔にあたり、口の中を負傷した。
- ・一輪車を使用して廃材の運搬作業中、転倒し肘を打撲した。

#### ●防止策

- ・周囲の状況に細心の注意を払い、足元が悪い場合は長靴等滑りにくい履物を履いてください。マスクやゴーグルの着用により身体への微細物の侵入を防ぐとともに軍手やゴム手袋によって手・指の擦過傷等を防いでください。活動後のうがい、手洗いも忘れずに行ってください。
- ・普段使いしない道具や器具を使用する際は事前に使用方法を確認し、無理のない範囲で慎重に取扱うよう心掛けてください。

詳細につきましてはふくしの保険ホームページ (<http://www.fukushihoken.co.jp>) をご参照ください。

<取扱代理店>株式会社福祉保険サービス  
〒100-0013東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル  
TEL 03-3581-4667 FAX 03-3581-4763 (受付時間: 平日9:30~17:30)

<引受保険会社>損害保険ジャパン日本興亜株式会社 医療・福祉開発部第二課  
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1  
TEL 03-3349-5137 FAX 03-6388-0154 (受付時間: 平日9:00~17:00)

ボランティア活動保険等についてのお問合せは、株式会社 福祉保険サービスまでどうぞ。

TEL/03-3581-4667 FAX/03-3581-4763 URL <http://www.fukushihoken.co.jp>

## INFORMATION

### 新たな日程で「ボランティア全国フォーラム」を開催します！

(2020年5月30日(土)・31日(日) 東京/全社協・灘尾ホール)

#### 開催を延期しました

「ボランティア全国フォーラム」(以下、フォーラム)は、2019年12月に開催を予定していました。しかし、今秋の台風15号・19号、10月25日からの大雨により東日本各地で大きな被害が生じ、フォーラムの主催である「広がれボランティアの輪」連絡会議の各構成団体では、現在も被災地支援活動に取り組んでおります。

これらの状況から、開催を延期しました。参加を予定されていた皆さまには、大変ご心配をおかけいたしました。

#### 新たな日程は2020年5月

新たに2020年5月30日(土)・31日(日)の2日間として、東京都で開催します。テーマは、ご案内していたように「広がれボランティアの輪」連絡会議の創設から四半世紀にわたるボランティア・市民活動の歩みを振り返り、次の時代に向けた活動の展望です。

プログラムの詳細は、「広がれボランティアの輪」連絡会議ホームページで紹介してまいります。ぜひチェックしてください。また、参加申込みは、2020年3月下旬以降を予定しています。

日 程	2020年5月30日(土)・31日(日)
会 場	全社協・灘尾ホール(東京都千代田区) ほか
主 催	「広がれボランティアの輪」連絡会議 / 全国社会福祉協議会
参 加 費	5,000円(予定) ※昼食、交流会等は別途
プログラム	
5月30日(土)(第1日)	
・記念講演 神野直彦さん(日本社会事業大学学長/東京大学名誉教授) (神野直彦さんプロフィール) 東京大学経済学部卒、日産自動車株式会社入社、その後東京大学大学院博士課程修了、大阪市立大学経済学部助教授、東京大学経済学部教授・経済学部長。総務省地方財政審議会会長を歴任。主な著書に「人間回復の経済学」(岩波新書・2002年) など。	
・パネルディスカッション	
5月31日(日)(第2日)	
・分科会	
「広がれボランティアの輪」連絡会議ホームページ <a href="https://www.hirogare.net/">https://www.hirogare.net/</a>	



「広がれボランティアの輪」連絡会議のマスコット「ひろ君」と「ガーちゃん」

今回の特集では、青森県五所川原市、栃木県日光市の取り組みを紹介させていただきました。地域の伝統文化をとりまく状況として、現代日本では担い手・財源不足などの課題がめだちますが、実は人々を心の底から惹きつける潜在的なパワーがあるのだと今回の取材からあらためて学ばせていただきました。

私自身、子どものころ故郷で経験した伝統芸能や伝統行事(おみこし、山車、どんど焼き、建舞、餅つき、地域のカルタ...)を懐かしき思いつつ、生活や仕事を通じて関わっている地域の歴史・文化をもっと知りたいと思うようになりました。ソーシャルワーク専門職のグローバル定義でもうたわれている「地域・民族固有の地」の視点、まちづくりをすすめていく上でも大切にしていきたいです。

(岸本)



事務局だより